

いろいろなモノをインターネットにつなぐIoT (Internet of Things)。モノのインターネットと呼ばれ、成長戦略を支える柱の一つだ。ただ、モノとモノをつなぐと言われても、すんなりと理解しにくい。どういうものか。期待を集めるのはなぜか。情報通信技術(ICT)と社会変革に詳しい森川博之・東大大学院教授に聞いた。

(聞き手 知野恵子)

編集委員が

迫る

「ゴミ箱やお笑い」

IoTとは、どういうものか。

「これまでインターネットにつなぐものは、パソコン、スマートフォン、タブレット端末を前提にしていた。IoTでは、ネットにつなぐものが家電、自動車、センサーなど様々なものに広がる」

「これまでにない新しい試みなのか。」

「構想や技術は昔からある。だが、2015年以降、注目が一気に高まった。関連する技術が進歩したことで、IoTという名前の良さが影響している」

「名前の良さとは。『モノ』とついている点だ。モノならウチの会社

IOT 裏方なんです



和田康司撮影

東大大学院工学系研究科教授

森川 博之 氏 52

もりかわ
ワーク。東
研究センタ
4月から現職
なども務め



データ活用何をつなぐか

にも関係する、と多くの企業経営者が関心を持つ。ただ、何をしたらいいかわからない。経営者向けに講演をすると、不安や焦りが伝わってくる」

「モノとモノをつなぐと言われてもピンとこない。具体例を教えてほしい。例えば、公園のゴミ箱。センサーをつけてネットにつなぐと、ゴミの量をネットで確認できる。それをもとに、収集車の台数や走る頻度を判断する。データなしの場合より、人件費、ガソリン代の節約になる。」

交通渋滞の緩和にもつながる。米国では回収コストが3分の1になった、という報告がある」

「日本でも、赤字のバス会社が、衛星を使った位置情報と乗降客数を数えるセンサーをネットにつないで黒字化した。データを継続的に採り、それをもとにバスの配置や時刻表を見直した。人が観察して数えても同じことができるが、そういう領域にもIoTが進出している」

「スペインのお笑い劇場は、客が笑うことに課金す

るシステムを試作した。前の座席の背にタブレット端末を取り付け、そのカメラで笑った回数をとらえる仕組みだ」